

第7章

世の中は暗い？明るい？ リアリズムとリベラリズム



授業中寝てばかりの健太にノートなんか見せてやるもんか。
しょせんこの世は食うか食われるか、弱肉強食なんだよ！

いやいや、康介にリアリストは似合わないぞ。この世は持ちつ持たれつなんだよ。悪いことは言わないからリベラリストになって世界平和と人類の共存を祈れ。そして僕にノート見せてくれ！



2人とも争いの次元が低すぎっ！
康介のノートなんか見たってテストでいい点とれるわけないでしょ！

人は誰だって、明るい面もあれば暗い面もあり、善人のときも悪人のときもあるものです。政治も同じです。

私は政治学というのは人間学だと思っています。その人が政治をどう理解するかは、人間や社会をどう見ているかに大きく左右されるからです。では、政治学で世の中を見る見方にはどのようなものがあるでしょうか？その中心となるのがリアリズムとリベラリズムです。



この章で学ぶこと

- リアリズムと安全保障のジレンマ
- リベラリズムの多様性
- 悪を知らない善は弱い

1 リアリズムと安全保障のジレンマ

人間が何らかの目標を達成するために国家（政府）を形成した、という考え方が社会契約説でした。私たちはなぜ政府をつくり、それに権力を与えたのでしょうか。トマス・ホッブズにとって、人間は自己中心的・利己的な存在であり、放っておけば世の中の自然状態は、「万人の万人に対する闘争」です。したがって人間は生き残るために政府をつくりそれに権力を与えたのでした。

では眼を現代の国際社会に転じてみましょう。

！ アナーキーとリアリズム

国際社会には1つの統一した政府が存在しません。このような状態のことを**アナーキー（無秩序）**といいます。国内に見られるような、権力分立とかさまざまな社会保障とかは存在しないのです。

国連（国際連合）があるじゃないか、という人がいるかもしれません。あるいは国際法という法律がある、と主張する人もいでしょう。

しかし、残念ながら国連は「話し合いの場」ではあっても、国内社会における警察のような強制力を常時持っているわけではありません。**安全保障理事会の常任理事国（アメリカ、ロシア、イギリス、フランス、中国）のうち1か国でも反対すれば、国連として強制力を用いることは不可能**です。これらの大国の利害と意見が一致することはまれです。おまけに常任理事国はすべて核保有国で武器輸出国でもあります。

また国際法は国と国が合意しなければ拘束力は生じません。違反しても国内法のような厳密な処罰があるとは限りません。国際司法裁判所は、当事国両方の合意がなければ（争っているすべての国が同意しなければ）そもそも裁判が始められません。

つまりは、国連と国際法どちらも、アナーキーな状態におけるある国の行動をコントロールする決定的な力に欠けているのです。

リアリズム（現実主義）は、ホッブズの見る「万人の万人に対する闘争」が国際社会の基本的な状態であると考えます。国家は国際社会で自国の利益（**国益**）を追求します（私たちが私たち自身の利益になることをまず追求するように）。一番重要な国益は、言うまでもなくその国家の生存です（私たちにあって、まず自分が生きのびることが最も重要であるように）。

国際社会には国内での政府のような存在はありません。その中で国家は自国の生存、自国を守ること（**安全保障**）を最優先する、とリアリズムの立

安全保障理事会の改革を、日本を含めた多くの国が提案しています。



場では考えます。

！ 安全保障のジレンマ

アナーキーな国際社会で自国の安全保障を最優先に考えればどうなるでしょうか。

A国が自国の安全保障を高めようとして、戦車を100台増強したとします。A国にとって自らを守るために行った当然の行為であっても、隣のB国にとっては自らの安全保障を低下させることになります。

B国は自らを守る当然の方策として、同じように戦車を100台（あるいはそれ以上）増強するでしょう。それを見たA国は自国の安全に脅威を感じて戦闘機を100機増強し、それに対してB国は戦闘機を120機増やして……。あとは無限に軍備拡張競争が続くことになります。これを**安全保障のジレンマ**（あるいは「ホブズの恐怖」）といいます。現在、世界には全人類を何回でも殺せるだけの核兵器がありますが、それはこのジレンマによる、とめどない軍拡競争の産物です（コラム「人生はジレンマだらけ」参照）。

第6章で扱ったキューバ危機は、安全保障のジレンマの典型的な例でしょう。キューバへの核ミサイルの配備は、劣勢に立った核のバランスを挽回しようとするソ連にとって「防衛行為」でした。しかしこれがアメリカにとって、喉元に突き付けられた「安全保障の危機」であったことも間違いありません。最近の研究では、キューバ危機はさまざまな偶然によって、辛くも核戦争の危機を避けることができたこともわかっています。

リアリズムの平和への処方箋の代表的なものは、**バランス・オブ・パワー（勢力均衡）**です。同盟などの手段で国力をバランスさせることによって、国際社会に他を圧倒するような国家が出てくることを防ぎ、戦争を抑制するのです。

つまり、**各国間に国力（主として軍事力）のバランスが取れている場合に平和が保障される**、と考えられます。国際社会はアナーキーであり、国家は自己保存（安全保障）を最も重視します。力が均衡しているため、どの国もあえて自分から戦いを起こそうとはしないのが平和な状態である、とするのが**リアリズム**の考え方です。

2 リベラリズム——理想的協調主義

ホブズは国際社会を「万人の万人に対する闘争」と見ていましたが、これに異論を唱える見方がリベラリズムです。

リベラリズムは、リアリズムとは反対に、国家の最重要課題は安全保障

に限定されているとは限らないと考えます。また、国家はお互いに交流し、人々が知り合い、経済の依存を深めることで争いの可能性を低くすることができると思います。

！ 2つのリベラリズム

しかし、リベラリズムという言葉は、しばしば混乱して使われています。「あの人はリベラルだ」と言ったとき、みなさんはどんな人を思い浮かべますか。弱者に対してやさしく、世の中の差別を許さない人。そんなイメージではありませんか。

国家レベルならば福祉の充実した政府、**結果としての平等**、つまり出自や環境にかかわらず、皆が同じ結果を享受するといったイメージがリアリズムにはつきまといます。

社会規制が多く、所得に対する税金が高くても、きちんと国家が福祉を運営し、老後や病気になったときの心配がないという意味での「大きな政府」が念頭に浮かびます。ヨーロッパではこの考え方は一般に**社会民主主義**と呼ばれます。デンマークやスウェーデンなど北欧の国が代表的です。

一方で、リベラリズムは「リベラル＝自由」ですから、個々人の自由を最大限に尊重するというイメージもあります。**機会としての平等**は大切にするが、その結果生まれた格差についてはある程度やむをえないものとするという面ももっています。スタートラインは皆一緒ですが、ゴールはそれぞれの能力、努力に応じて異なってくるのです。

そのため、税金をなるべく軽くして、政府の規制をなくし、個人や企業が自由に活動できるようにするといった政策をとる場合もあります。これは先ほどとは逆で、効率的な「小さな政府」です。これもまたリベラリズムですが、前者と区別するために、日本語では**新自由主義**とか**リバタリアン**（自由至上主義、自由尊重主義）などと呼んでいます。

！ リベラリズムの出発点

全く相反するこの2つのリベラリズムですが、もともとの出発点は一緒です。

古典的な意味でのリベラリズムとは、すべての個人に国家や宗教や他者からの自由を保障しようとする考え方です。中世社会では強大な王権や国家の力、あるいは宗教の存在が、個人の選択や職業、はては結婚までを左右していました。それら「強大な力」を排除して自由になろう、というのが出発点なのです。^{*1}

北欧では税負担が7割を超える国もありますが、福祉の完備で「国に貯金する」という感覚なのかも。



***1 中世における権力**
たとえばモーツァルトのオペラ「フィガロの結婚」は、花嫁に対する「初夜権」を領主から取り戻そうとするのがテーマである。

*2 生命と私的所有の自由

「自然の理性が教えるように、人間は、ひとたび生まれるや生存の権利をもっており、したがって食物飲料その他自然が彼らの存在のために与えるものを受ける権利をもつのだと考えることができる」(ロック『市民政府論』)。



ジョン・スチュアート・ミル
1806～1873
イギリスの哲学者、経済学者。ロンドンで下院議員も務めたが、婦人参政権を含めた普通選挙を主張するなど当時としてはリベラルすぎたため、次回選挙では落選した。

*3 ミル『自由論』山岡洋一訳、光文社、2006年

ロックの自然状態は「他人の自由や所有権を侵害してはいけない」というもので、「万人の万人に対する闘争」と考えたホブズほど厳しいものではありませんでした。

人々が政府を形成するのは、そのほうが確実に生命の自由や自分の持ち物の安全が獲得できるからです。したがって、生命と私的所有の自由は何者にもまして重要です。*2

さらに、ヨーロッパの宗教戦争の悲惨な経験から、思想・信仰の自由という考え方が生まれてきました。第8章で紹介するウェストファリア条約(1648年)はその結果の1つです。信仰が違っていることによる争いを避け、異なる価値観の共存が模索されたのです。

19世紀イギリスの思想家、**ジョン・スチュアート・ミル**の『自由論』(1859年)は、このような古典的な自由主義の到達点です。彼は『自由論』の中で、政府・社会・他者が個人へ干渉することが正当化されるのは、他者への危害を防ぐ場合に限られるとしました。

ミルはこう述べています。「人間が個人としてであれ、集団としてであれ、誰かの行動の自由に干渉するのが正当だといえるのは、自衛を目的とする場合だけである。」*3

そして自由な選択を通じて獲得される能力や個性が、個々にとっての幸



社会主義・共産主義

皆さんはアルバイトをしていますか？ もし、皆さんの働きでお店の売り上げが1万円伸びたとします。アルバイト代がそのまま1万円上がることはあるでしょうか？ 答えはノーです。経営者は皆さんに通常のアルバイト代を支払い、店の設備や原料費を支払い、残りはすべて利益として計上します。これが資本主義です。

それに対して社会主義とは、資本主義的な経済活動を否定し、生産手段(たとえば工場)の社会的な所有と計画的生産、平等な分配を行おうとする考え方です。

先の例で言えば、お店が労働者である皆さん自身のものならば、お店の利益はそのまま皆さんの懐に入るはずですが。

社会主義的な考え方は19世紀初めからありましたが、『資本論』を書いたカール・マルクス(1818～1883)によって科学的社会主義として大成されました。

た。そして1917年のロシア革命によってはいじめての社会主義国であるソビエト連邦が現実に生まれたのです。

社会主義がさらに発展すれば共産主義になります。生産力(ものを作り出す力)が無限に増大すれば、「能力に応じて働き、必要に応じて取る」——そのような理想の社会を夢みて多くの社会主義国が生まれ、先進資本主義国の中でも社会主義的な考えが大きな力を持ちました。

しかし、社会主義国の現実はいく一部への絶大な権力の集中と経済の停滞、大多数の国民の貧しい暮らしでした。理想を追い求めるあまり、人間の現実を見据えることがなかったからなのでしょう。

1991年にソ連が崩壊し、それに続く東欧社会主義国の消滅、中国の実質的な市場経済化によって、社会主義は(思想としての重要性は別として)かつての勢いを失いました。

福と社会の進歩をもたらすと考えたのです。

「個性を育てていくことによって人間の生活は豊かになり、多様になり、活発になり、高級な思想と崇高な感情を育てる材料が豊富になり、人類がはるかに素晴らしいものになる。」

楽観的なまでの人間に対する肯定（ミルはその厳しさもよく知っていましたが）と言えるでしょう。

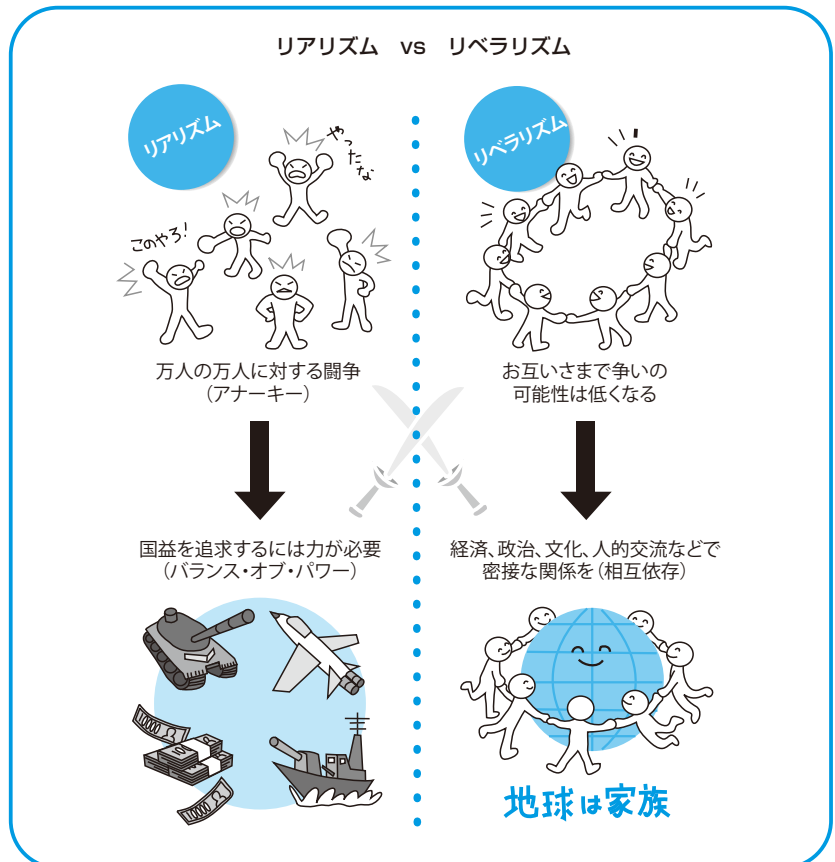
！ 社会主義の影響とリベラリズムの課題

一方で19世紀に社会主義が登場すると、リベラリズムもその影響を受けます。

単に、政府・社会・他者の干渉からの消極的自由（「～からの自由」）でなく、個人の自由を阻むものを国家が除くべきだという積極的自由（「～への自由」）の議論があらわれてきます。「消極的自由」「積極的自由」の議論は20世紀イギリスの思想家アイザiah・バーリンが提示した概念です。

これによって、初等教育や、衛生的な生活、過酷な労働条件からの脱

1960年代など日本でも学生運動が盛んで、社会主義革命が起こるのではと思われた時期もありました。皆さんには不思議でしょうね…



却、安定した雇用、社会保障の充実といった要求がリベラリズムの中に加わりました。先述の社会民主主義と呼ばれる流れはここから生じます。このようにリベラリズムは多様な概念なのです。

リベラリズムとは、逆説的ですが、自由であるために何らかの制約を前提としています。親がいるから独立しようとするのだし、嫌な相手だから逃れようとするのです。つまり戦う対象となる、何らかの「敵」が必要なのです。

日本の政党でリベラル色を打ち出して2大政党制を志向したのは民主党です。しかし、打倒すべき自由民主党を倒し、2009年に政権を取ったとたんに勢いを失ったのは、ここに原因があると筆者は考えています。「敵」がいなくなると、自分の存在意義もあいまいになってしまったのです。豊かな社会でリベラリズムが陥る罠はそこにあるのかもしれませんが。

！ リベラリズム＝理想的協調主義

リベラリズムは**協調、平和、進歩などを重要視する理想的協調主義**という意味合いで使われます。大切なことは、リベラリズムは人間を利己的にだけ行動するものとはとらえていない点です。国家の間や人びとの間にも



人生は火葬場までの待合室

国際政治学の生みの親であるE. H. カーはリアリストに固有の欠陥として、「その思考が何も生まないこと」をあげています（第8章参照）。

政治のリアリズムとはどんなものでしょうか。政治家にとって一番大事なことは選挙で、当選するためだったら何でもするし、権力は絶対腐敗するし、マスコミだって信用できないかもしれない。人間は権力を握るためには手段を選ばないし、いったん権力の座に就いたらそれを手放そうとはしない。世界は万人の万人に対する戦いである……もうたくさんですね。

ところで人生において究極の現実は何でしょうか？ あらゆる学問が絶対に否定できないこと。それは「人間は必ず死ぬ」ということです。ありていと言えば「人生は火葬場までの待合室」です。

人は必ず死ぬ。そのことだけを考えていたら、人生は全然楽しくありません。勉強をしても、お金を

稼いでも、恋をしても、最後に待っているのは火葬場です。

ただ、「死」があるからこそ、人生は充実しているのだという見方も可能です。もし人間に死ぬことがなければ、なにをやってもんべんだらり、永遠に時間があるのですから、出会いと別れにも感激はありません。別れがあるからこそ、今一緒にいる時間が貴重に感じられるのです。

政治でも徹底したリアリズムを経たものだけに、本当の光が見えることがあります。教会で暗闇の中にステンドグラスからさっと日が射すと光が鮮やかに見えますね。

現実に立脚しない政治は弱いものですが、リアリズムをしっかりと持った上で、鮮やかな希望をもたらすものがリベラリズムではないかと筆者は考えています。

共通の利益やルールが存在しており、国内と同じように秩序を形成することによって平和を保てると考えるのがリベラリズムの特徴です。

リアリズムのアナーキーな状態に対する代表的な解決策がバランス・オブ・パワーであるのに対し、リベラリズムは**相互依存**を大切なものと考えます。相互依存とは、経済、政治、文化、人的交流など多くの分野で国家間に密接な関係があることです。とりわけ経済の分野での国境を越えた関係が深化することによって、国家間の協力が進み、争いが防げるとリベラリストは考えます。

相互依存や国境を越えた **地球社会の存在**、**国際レジーム**（国際的な枠組み：国連や自由貿易など）を重視することで、争いは防げるとするのがリベラリズムです。

！ 悪を知らない善は弱い

皆さんは、自分の生きているこの世の中をどんなふうに見ていますか？ 周りのすべての人は親切で信頼するに足り、自分は豊かな愛情に囲まれて生きてきたと感じていますか？ それとも、人間は全く信用できない、放っておけば他人は私の人生を無茶苦茶にしようと感じていますか？ この2つは両極端ですから、おそらくほとんどの人はその中間のどこかになることでしょう。

ある人は「現実を見れば、悲惨なことばかりではないか」と言うでしょう。人間は自己中心的な存在であり、放っておけば世の中の自然状態は「万人の万人に対する闘争」です。

でも別の人は「そうじゃない、人間は捨てたものではない、世の中にはすばらしい人たちがいっぱいいる」、そう主張するかもしれません。人間は話し合うことによって相互理解が可能だし、お互いの関係が深まることによって、争いの可能性は低くなるというわけです。

前者がリアリズム的、後者がリベラリズム的な考え方です。人間の中の善なるものを信じればリベラリズムが優勢になるでしょうし、悪なるものの存在を見ればリアリズムが頭をもたげてくるのです。

リアリズムとリベラリズムは主として国際政治を説明するのに使われる用語です。しかし、人間の中の善を信じるか、悪を見据えるか、というのは政治という極めて人間的な営みを理解する基本だと筆者は思っています。したがってもう少し広い意味でこの言葉を使っています。

大事なことは、皆さん一人ひとりの中にも、この善と悪が両方存在していることです。

ある人類学者によれば「生物学的に見れば人間の愛は4年で終わるのが自然」なのだそうです。それでも皆さんは恋をしますか？



あなたが大切な誰かと同じ部屋の中にいると考えてください。そこへ突然、大地震が襲います。さて、あなたはどうしますか。すぐに揺れが収まるなと思えば、その人をかばうかもしれません。でも、一刻の猶予もなく建物が崩壊しそうになったら、大切な人を置いて自分がまず逃げ出すかもしれませんね。それは誰にも断言できないのです。

そんな究極の状態でなくても、たとえば疲れて電車に座しているときに、目の前にお年寄りが乗ってきたとします。タヌキ寝入りを決め込むか、立ち上がって席を譲るか、迷わずに行動できるでしょうか。他人のためになりたい、でも自分の利益も失いたくない、そう思うことは当然でしょう。まさに「人生はジレンマだらけ」です。

人間の中には利己的と利他的なものが両方存在しています。リアリズムとリベラリズムはどちらも真実であり、どちらも大事です。「人間の悪をしっかりと見据える」「人間の善なるものを信じる」、その両方の視点が必要なのです。政治学を理解する時もまったく同様です。リアリズムとリベラリズム、その両方を持ち合わせた「複眼思考」が必要です。

ただし、政治の基本はリアリズムだと考えられます。なぜならば、「悪を知らない善は弱い」からです。人間の暗い面に眼を向ける勇気のない理想は脆いのです（と、自戒の念をこめて断言します）。

レイモンド・チャンドラーの小説に出てくる私立探偵・フィリップ・マローウはこうつぶやきます。「タフでなければ生きていけない。やさしくなければ生きている価値がない。」*4

利己的であることは生きていく上で必要なときがあります。しかし、人間は利己的なだけでは幸せになれません。他人を幸せにする人が自分も幸せになる、というのも真実です。リアリズムとリベラリズム、その両方を兼ねることの難しさと必要性を感じます。

* 4 原文はIf I wasn't hard, I wouldn't be alive. If I couldn't ever be gentle, I wouldn't deserve to be alive.



- 「あの人はリアリストだ」「あの人はリベラリストだ」というとき、どんなイメージで言葉を使っていますか。それは人間のどんな面に光を当てているでしょうか。あなた自身は、自分のことをリアリストだと思いますか。それともリベラリストでしょうか。
- リアリズムとリベラリズムの発展形であるネオ・リアリズム、ネオ・リベラリズムや、マルクス主義、コンストラクティヴィズムとはどんな考えでしょうか。調べてみましょう。



人生はジレンマだらけ

ジレンマとは「相反する2つの事柄の板挟みになって進退きわまること」を言います。政治学でよく取り上げられる「囚人のジレンマ」をはじめ、いくつかをご紹介します。

●囚人のジレンマ

A、Bの2人が重大な犯罪（銀行強盗）の疑いで警察に捕まりました。警察はA、Bを軽犯罪（拳銃所持）で起訴することはできますが、銀行強盗については十分な証拠を持っていません。そのためA、Bを別々の牢屋に入れて（お互いに連絡が取れないようにして）取引を持ちかけました。

もし2人が黙秘したままであれば、2人とも軽犯罪で懲役1年。2人とも自白すれば共に起訴されて5年。もし1人が自白して、もう1人が自白しなければ、自白したほうは無罪、黙秘したほうは10年間刑務所暮らしをしなければなりません。

2人にとってベストな答えは、共に黙秘をして1年の刑務所暮らしをすることでしょう。しかし現実には、お互いがお互いの裏切りを心配して、A、Bとも自白する可能性が高いのです。つまり、両方とも懲役5年となります。

安全保障のジレンマはこの囚人のジレンマの典型です。両方が軍備縮小すればお互いにとってベストな答えが得られるのに、相手が軍備増大に走り自らが攻められることを恐れて軍備拡張が続く。囚人のジレンマは国際協力の難しさを示すなど、さまざまな示唆にとんだゲームです。



		B	
		黙秘	自白
A	黙秘	A B (1, 1)	A B (10, 0)
	自白	A B (0, 10)	A B (5, 5)

●チキンゲーム

チキンとは「臆病者」のことです。どちらが勇敢であるか2人の若者が争いました。その結果、一本道の両端からそれぞれフルスピードでオートバイを運転して、お互いの方向に向かっていきます。

道は一直線、このまま直進すれば正面衝突して両方とも死んでしまいます（最悪の結果）。しかし、自分から先にコースから外れて回避したら、臆病者（チキン）と言われてお互いのグループでリーダーとして面目を失い、回避した方にとっては最悪の次に悪い結果、もう一方にとっては最善の結果となってしまいます。

「回避」を非戦争、「直進」を戦争と考えるならば、これも安全保障のジレンマをよく表しています。

「囚人のジレンマ」「チキンゲーム」は、どちらも戦いを望んでいないのに、戦争が始まってしまう状況を説明しています。数学を使った分析論であるゲーム理論の代表例でもあります。ゲーム理論は、複数のプレーヤーの意思決定を数学的なモデルを使って説明する手法です。経済学において発達した後、国際政治にも導入されて使われています。

これらとは別に政治の世界では、「殺してはいけない」「子どもは救うべき」といった2つの道德原則が相互に対立して、困難な「道德的ジレンマ」も存在します。

●ソフィーの選択

ナチスによるユダヤ人強制収容所において、ソフィーは2人の子どものうち、どちらかを選べばその子どもは助かるが、選ばなければ両方とも助からないと告げられます。彼女はやむなく1人を選びますが、後悔に苛まれ、自ら命を絶ってしまいます。

ルワンダの虐殺（第11章参照）で、これと似た選択を迫られた女性の話を聞きました。ツチとフツは通婚が進んでいました。子どもは父親のエスニックとされます。フツの母親は、裏切り者として殺されるか、自分の手で子ども（ツチ）を殺してフツへの忠誠を示すか迫られたそうです。

人間の世は、ジレンマに満ちています。リアリズムを選べば「非人間」と言われるかもしれません。リベラリズムを選べば最悪の場合、自分の命を失います。ジレンマをどう解決するのか。それも政治学を学ぶことによって得られる知恵です。